

文楽人形遣いにおける演技動作と呼吸の対応関係

Relations between theatrical motions and breathing in an Bunraku puppeteer

渋谷 友紀[†], 森田 ゆい[‡], 福田 玄明[†][¶], 植田 一博[†], 佐々木 正人[†]
Tomonori Shibuya, Yui Morita, Haruaki Fukuda, Kazuhiro Ueda, Masato Sasaki

[†] 東京大学, [‡] NPO法人日本伝統芸能教育普及協会<むすびの会>, [¶] 現所属: 理化学研究所
The University of Tokyo, NPO Association for Education of Japanese Traditional Performing Arts, RIKEN
qq66212@iii.u-tokyo.ac.jp

Abstract

In sports and Western dances, the relationship between a performer's body action and breathing generally becomes synchronized. But, recent studies reveal that breathing is not synchronized with body action in masters or experts in Kyogen and Kabuki, Japanese traditional performing arts. Bunraku, which is also one of the Japanese traditional performing arts, is a form of puppet theater in which three puppeteers cooperatively maneuver one puppet. Bunraku has thus different characteristics from Kyogen and Kabuki; the body (puppet) that performs actions is different from the bodies (puppeteers) that control the actions, and the bodily actions are different from the speeches. In this study, we clarified relation between body action and breathing in Bunraku puppeteers and compared it with that found in Kyogen and Kabuki. In our experiment, Two Bunraku puppeteers who were different in career participated. And we investigated the correspondence between their breathing phases and the puppet's motions, the periodicity of their breathing by analyzing autocorrelation of breathing curves, and the stability of their breathing by comparing the results of Fourier transform of breathing curves with each other. As a result, breathing was found less synchronized with body action for the more experienced puppeteer than for the less experienced puppeteer. And, the experienced puppeteer had more periodic and stable breathing than less experienced one. Along with the previous findings, the results suggest that a common breathing technique may be used among Japanese traditional performing arts, Kyogen, Bunraku and Kabuki.

Keywords — Japanese traditional performing arts, Bunraku, breathing, skill proficiency

1. はじめに

日本の古典芸能において、「呼吸」はもっとも基礎的な技能の一つと考えられている[1]. 日本の代表的な古典芸能である狂言と歌舞伎を対象にした最近の研究では、舞台歴の長い演者が基本的な演技動作を行う際の体の動きと呼吸相の関係は、舞

台歴の短い演者に比べ非同期的になり、呼吸周期も整うという結果が報告されている[2][3]. これは、スポーツやダンスにおいて動作と呼吸相が同期的になるという結果と対照的である. 森田らは、ここに日本の伝統芸能に特徴的な呼吸技法が見出せる可能性を示唆している[3].

2. 目的

日本の古典芸能の一つである文楽は、狂言や歌舞伎にない特徴、すなわち、(1) 人形遣いが一人の人形を3人で演じること(三人遣い)、(2) 演じる身体とそれを操作する身体が異なっていること(人形芝居)、(3) 演技をする身体と台詞を言う身体が異なっていること(三業)という特徴を有する. これらの3つの特徴は、狂言や歌舞伎のように(1) 1人の人物が、(2) その身体において、(3) 演技と台詞を体の動きを行う芸能と異なっている. そのため、これまでの狂言や歌舞伎とは異なる可能性を示している.

しかし、もし森田らが述べるように、日本の伝統芸能に共通する呼吸技法が見出せるなら[3]、文楽の人形遣いでも同様の特徴が見出せるはずである. この呼吸技法について、小林らは、舞台歴53年の熟練した狂言役者へインタビューを行い、次のような見解を得ている [2].

非常に感覚的なものの言い方をすると、気合いと呼吸は別のものであり、気が入ったときも呼吸は安定しているのではないかと. 例えば怒りを表現していても自分自身は怒ってはいけない. 自分の呼吸は安定している. そう

いう意味で（安定した呼吸は）世阿弥の言う「離見の見」ともつながるものではないか。

言い換えると、この狂言役者は、世阿弥の「離見の見」という言葉を引きながら、役と役者自身との関係が必ずしも重なり合うようにならないことを、役者としてのひとつの理想として述べている。役と演者の関係について、文楽の人形遣いは、次のように述べている[4]。

たとえば自分の遣っている人形と自分（主遣い）の呼吸があまりにも一緒だと、未熟な印象を与えるんですよ。人形に息を吹き込むというのが人形遣いの仕事ですよ。人形に自分の息とは違う別の息をさせることだと思うんです。

すなわち、文楽の人形遣いにおいても、熟達した狂言役者が演技動作と呼吸との関係について述べた、“役と役者（演者）が重なるようにならない”という理想を共有していると言える。したがって、演技動作と呼吸との関係についても、狂言・歌舞伎同様に非同期的な関係になる可能性がある。そこで本研究では、文楽の人形遣いにおける演技動作と呼吸の関係を明らかにし、狂言や歌舞伎の結果と比較した。

3. 方法

現在、財団法人文楽協会に所属する舞台歴 31 年の演者と舞台歴 13 年の 2 名の演者に 3 つの課題を行っていただいた。課題はそれぞれ、(1) 普段よく遣う「女形」の人形を用いて基本的な動作を行う課題、(2) 「女形」に比べるとあまり遣わない「立役」の人形を用いて基本的な動作を行う課題、(3) 『艶姿女舞衣』という演目の「お園」という役を、義太夫節に合わせて本番と同じように演じる課題である。そのうち (1) と (2) の課題については、普通の早さで遣う「普通」条件と、普段よりゆっくり遣う「ゆっくり」条件を設け、それぞれの条件で 3 試行ずつ行った。また、(3)

は、速度条件は設けず 3 試行ずつ行った。

そのうえで、人形遣いの体の動きと呼吸の関係を明らかにするため、上記 3 つの課題に共通する演技動作である「おじぎ」の部分について、(a) 人形の演技動作と主遣いの呼吸相の対応関係を調べるため、「おじぎ」動作を 4 つに区分した「動作フレーズ」と呼吸相の同期性を検討した。その際、(b) そこで得られた結果が呼吸の周期性の乱れによるものでないかどうか確認するため、当該部分の呼吸曲線の自己相関関数分析を行い呼吸の周期性を検討した。さらに、(c) 当該部分の呼吸曲線の周波数解析を行い、試行間の周波数のばらつきを調べることで、それらの呼吸の特徴が安定的に再現されているかどうか検討した。

4. 結果

以上の実験および分析の結果、(a) 舞台歴の長い演者の演技動作と呼吸相の関係は舞台歴の短い演者の場合に比べてより非同期的になる傾向が確かめられた（表 1）。

図 1 は、動作フレーズの開始時と呼吸相の対応関係を示した。薄い網掛け部分は各演者の同一課題、同一速度条件内での 3 回の試行の全てで同じ

表 1 動作フレーズと呼吸相の関係

課題	舞台歴	動作フレーズ	普通			ゆっくり		
			1 試行目	2 試行目	3 試行目	1 試行目	2 試行目	3 試行目
女形	31 年	①	呼気	呼気	吸気	呼気	呼気ピーク	呼気
		②	吸気	吸気	吸気	吸気ピーク	吸気	吸気
		③	吸気	呼気	吸気	吸気	呼気	呼気
		④	呼気	呼気	吸気	吸気	吸気	呼気
	13 年	①	呼気	呼気	吸気	吸気	吸気	吸気
		②	呼気	呼気	呼気	呼気	呼気	呼気
		③	呼気	呼気	呼気	呼気	呼気	呼気
		④	呼気ピーク	吸気	呼気ピーク	吸気	吸気ピーク	呼気
立役	31 年	①	呼気	吸気	吸気ピーク	呼気	呼気	呼気
		②	吸気	呼気	呼気	呼気	吸気	吸気
		③	呼気	呼気	呼気	呼気ピーク	吸気	吸気ピーク
		④	呼気	呼気	呼気	吸気	呼気	呼気
	13 年	①	呼気	呼気	呼気	吸気	吸気	吸気
		②	呼気	呼気	呼気	呼気	呼気	呼気
		③	呼気	呼気	呼気	呼気	呼気	呼気
		④	吸気	呼気	呼気	呼気	吸気	呼気
お園	31 年	①	呼気	吸気	吸気	—	—	—
		②	吸気	呼気	吸気ピーク	—	—	—
		③	吸気	呼気	吸気	—	—	—
		④	呼気	吸気	吸気ピーク	—	—	—
	13 年	①	吸気	呼気	呼気	—	—	—
		②	呼気	呼気ピーク	呼気	—	—	—
		③	呼気	吸気ピーク	吸気	—	—	—
		④	呼気	吸気	吸気	—	—	—

呼吸相と対応していたフレーズ、濃い網掛け部分はある演者の速度条件は考慮しない同一課題内での6回の試行の全てで同じ呼吸相と対応していたフレーズである。これを見ると、舞台歴13年の演者は、舞台歴31年の演者と比べ、同期しているフレーズが多かった。また、舞台歴13年の演者は、すべての試行において、その動作フレーズ②が同じ呼吸相（呼吸相）に同期していた。

次に、舞台歴の長い演者と、舞台歴の短い演者の(b)周期性を検討した(図1)。

図1には、課題(1)(女形)を行った際に得られた呼吸曲線の自己相関を示した。本研究では、

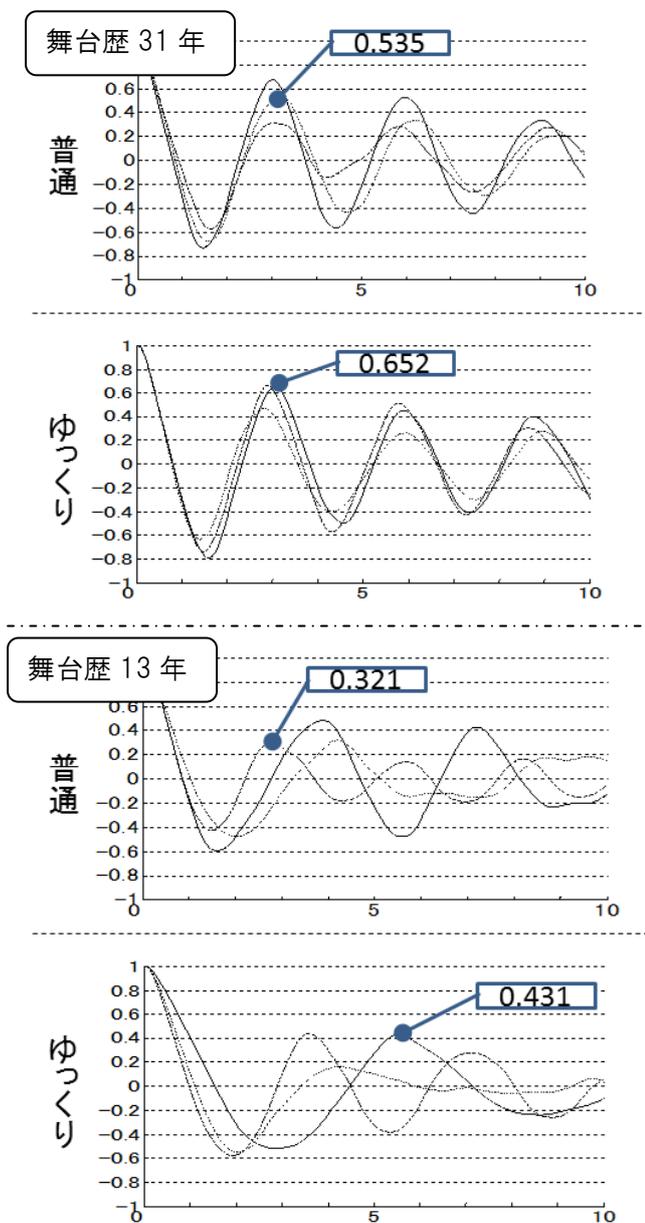


図1 課題(1)(女形)を行ったときの自己相関関数

隣り合った呼吸周期の相関を表していると考えられる第1ピークの相関係数を分析対象とした。第1ピークは、各条件で3試行分あるため、そのうちの間値を代表値として採用した。図中に書き込まれた数値は中間値である。

この図から、舞台歴31年の演者の演者のほうが、13年の演者に比べ、より周期的な呼吸をしていると言える。各速度条件で2人の演者を比べるため、第1ピークの間値について同等性の検定を行ったところ、「普通」($\chi^2(1)=9.42, p=0.002<.01$), 「ゆっくり」($\chi^2(1)=30.18, p<.01$)のどちらの条件でも有意差が認められ、舞台歴31年の演者の自己相関係数の値が高かった。

同様に、課題(2)(立役)を行なった際に得られた呼吸曲線について、中央値を用いた相関係数の同等性の検定を行った結果、「普通」条件では有意差は認められなかったが($\chi^2(1)=0.3, p=0.55>.05$), 「ゆっくり」条件では舞台歴31年の演者の自己相関係数の値が有意に高かった($\chi^2(1)=4.38, p=0.03<.05$)。すなわち、「立役」の型では、「女形」ほどの明確な差は認められないが、それでも「ゆっくり」条件においては、舞台歴31年の演者の呼吸の周期性が高いと考えられる。

最後に、課題(3)(お園)を行なった際に得られた呼吸曲線であるが、舞台歴13年の演者の呼吸の乱れが激しく、第1ピークの中央値を示すのが困難であるため、同等性の検定を行わなかった。ただし、舞台歴13年の演者の第1ピークが見出しにくいほど乱れているのに対し、舞台歴31年の演者では他の2つの課題に比べると低い値(約0.3)を示している。ここでも舞台歴31年の演者の呼吸がより周期的になっていることが伺える。

(c) 安定性については、表2を検討する。

表2 課題(1)女形のパワースペクトルのピーク値とその標準偏差

	1 試行目	2 試行目	3 試行目	標準偏差
舞台歴31年 普通	0.352	0.313	0.313	0.018
舞台歴31年 ゆっくり	0.352	0.352	0.352	0.000
舞台歴13年 普通	0.273	0.352	0.234	0.049
舞台歴13年 ゆっくり	0.156	0.273	0.234	0.049

表2は、課題(1)(女型)を行なった際の呼吸曲線をフーリエ変換し、そこで得られたピーク値と、その標準偏差を示した。これを見ると、舞台歴13年の演者は、舞台歴31年の演者に比べ、呼吸周期が試行毎、条件毎にばらつく傾向があるように見える。F検定による等分散の検定の結果、「普通」条件では、2人の演者の間に有意な差は見られなかったが($F(2,2)=6.98, p=0.12>.05$),「ゆっくり」条件では有意な差が認められた($F(2,2)=7.69 \times 10^{29}, p=0.00<.05$)。また、速度条件を考慮しない演者間の比較でも有意な差が認められた($F(2,2)=10.1, p=0.01<.05$)。以上のことから、課題(1)では、舞台歴31年の演者の方が試行毎に安定した呼吸をしていると考えられた。

次に、課題(2)では、「ゆっくり」条件($F(2,2)=27.94, p=0.03<.05$)、および速度条件を考慮しない演者間の比較($F(2,2)=5.99, p=0.03<.05$)で有意な差が認められた。一方、課題(3)では、演者間に有意な差は認められなかった($F(2,2)=1.32, p=0.43>.05$)。

以上の3つの分析をまとめると、全課題を通じて、舞台歴の長い演者は、舞台歴の短い演者に比べ、人形の演技動作と呼吸相が独立になる傾向にあった。また、課題(1)普段から遣っている人形を用いた場合、ならびに課題(3)義太夫節に合わせる場合には、狂言や歌舞伎と同様、舞台歴の長い演者の呼吸は舞台歴の短い演者に比べて周期的であった。課題(2)普段はあまり遣っていない人形を用いた場合には、その差は必ずしも明確ではなかったが、舞台歴の長い演者が周期的になる傾向があった。呼吸の安定性については、課題(1)普段から遣っている人形、および課題(2)普段はあまり遣っていない人形で、「型」を用いた場合には、舞台歴によって差が出る傾向が認められたが、課題(3)の義太夫節に合わせた演技では、その差はほとんど見られなかった。

5. 考察

演者間の比較の結果から、小林ら[2]、森田ら[3]の先行研究が示唆した、熟達した演者は、そうで

ない演者に比べ演技動作と呼吸が互いに独立に営まれるという日本の古典芸能に共通する呼吸法が文楽においても確認できた。それに加え、課題間の比較からは、すべての課題で、熟達するにしたがって呼吸が非同期的で周期的になる傾向は共通するものの、両演者とも、単純な「型」を行う場合に比べると、義太夫節に合わせて実際の本番に近い状況で行う場合で呼吸の周期性が乱れることが確認された。以上のことから、原則として熟達するにつれて呼吸は安定したものになっていくと考えられるが、一方で、義太夫節に合わせた本番が想定されるような状況、すなわち2章で述べた役と演者の関係の問題が想定される状況では、義太夫節が呼吸に強く影響していることが示唆された。これは、言い換えれば、理想は“役と演者が重ならないようになる”であり、呼吸が一定になることであるが、しかし、実際の演技場面では、この役と演者自身の“距離”の維持が極めて難しいため、芸談などでは、ことさらこの距離が問題にされてきたということではないだろうか。

2章で述べた文楽特有の劇構造と、呼吸の関係を調べるのが今後の課題である。

参考文献

- [1] 観世 寿夫, (1979) 『心から心へ伝ふる花』, 白水社.
- [2] 小林 ゆい, 森下 はるみ, (2000) “狂言における基本的動作と呼吸パターンの関係: 大蔵流山本家を事例として”, 体育学研究, Vol. 45, No. 1, 77-88.
- [3] 森田 ゆい, 佐々木 玲子, (2005) “日本の古典芸能における呼吸技法”, バイオメカニクス研究, Vol. 9, No. 2, 138-145.
- [4] 吉田 勘弥, 佐々木 正人, (2006) “文楽人形の運動制御”, 佐々木 正人 編, 『アート/表現する身体: アフォーダンスの現場』, 東京大学出版会.